

# 進捗状況報告シート

(2010年度・大学)

担当部局は☆印の箇所を記入のこと。

## I. 評価項目・要素と担当部局

対象部局	産業研究所
大項目	4 教育研究組織
中項目	
小項目	4.0.1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
要素	教育研究組織の編制原理 理念・目的との適合性 学術の進展や社会の要請との適合性 (KG1)研究活動の状況
小項目	4.0.2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
要素	

## II. 自己点検・評価《進捗状況報告》

### 【現状の説明】

#### 《目標・指標》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定した。

目標の進捗状況は「A:適切に実行している」「B:概ね実行している」「C:必ずしも実行していない」「D:実行していない」とし、自ら評価した。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価
1. 各事業の運営には、学部・研究科の垣根を越えて、テーマに適材の人物を核に当てる。	→研究プロジェクトには、経済学部、商学部以外の代表者によるプロジェクトを創出させる。	A
2. 毎年新設する研究プロジェクトの研究員は、特定学部へ偏らないように、テーマに応じて広く学内の各部局から選ぶ。	→研究プロジェクトの学内研究員は、原則として3学部以上からの構成とする。	B
3. 産業研究所独自の活動以外に、大学の主催する学術行事や国際交流活動についても、企画、運営を担当する。	→大学主催行事の企画、運営を毎年2件以上担なう。	B
4. 他大学や学外機関と連携するEUIJ関西事業や日中経済シンポジウム事業を毎年企画・運営する。	→EUIJ関西行事、EU情報センター行事を毎年5件以上行う。日中経済シンポジウムを毎年開催する。	A
5. 事務職員が『産研叢書』『産研論集』編集に加わり、迅速性と明瞭なレイアウトをめざす。	→『産研叢書』は、学外者の書評（『産研論集』掲載）での肯定的評価。『産研論集』は企画論文を毎年必須に。	A

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価
	→	☆
	→	☆

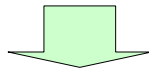
### 《小項目ごとの現状説明》 ※ 全小項目について記述が必要

☆ 小項目4.0.1	(現状説明) 産業研究所は、2008年の産業研究所規程改正後、学内の社会科学系研究所としての存立基盤がある。設立当初の商経学部付置研究所の性格を長く引きずっていたが、取り扱うテーマを産業経済から広げていく必要がある。
☆ 小項目4.0.2	(現状説明) 検証の場は運営委員会である。規程改正により委員の構成が変わり、産業研究所図書資料管理のあり方など、今までになかった全学的立場での意見が交わされるようになってきた。
☆ その他	2009年度は、講演会、セミナーにおいて産業経済テーマのみならず、社会福祉や国際政治等との学際領域にも取り組み始め、2010年度開始の研究プロジェクトは初めて代表者に所属が経済学部、商学部以外の研究者を選んでいる。

## ◎効果が上がっている事項

## 【点検・評価 (1)】効果が上がっている事項

小項目4.0.1	共同研究プロジェクトについて、経済、産業のテーマから、より広い社会科学のテーマ選択。
★小項目4.0.2	運営委員の所属が社会科学系部局に広がったため、産研図書資料の活用や利用の利便性に広い観点から意見が出されるようになり、結果として大学図書館へ管理を一元化するコンセンサスが得られている。
その他	経済、産業のテーマをベースにしながら、多様化する社会現象を捉える研究機関として、ユニーク性を持たせた。



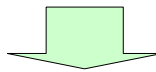
## 【次年度に向けた方策(1)】伸長させるための方策

小項目4.0.1	E Uが先行する社会制度、たとえば社会福祉、女性労働、消費税の弾力的な取り扱い制度などテーマ選択。
★小項目4.0.2	ホームページで事業内容を分かりやすく伝え、大学構成員へ向けて研究事業のアカウントビリティを高める。
その他	各学部で行えない活動（研究機関誌に特定テーマについて学外若手研究者の論文を採用など）を展開していく。

## ◎改善すべき事項

## 【点検・評価 (2)】改善すべき事項

小項目4.0.1	全学的なE U I J 関西事業や日中経済シンポジウム事業と事務局の産業研究所長との関係が明確でない。
★小項目4.0.2	授業期において、運営委員会の開催に際して、定数確保が難しい面がある。
その他	『産研叢書』（共同研究成果報告）の原稿提出に遅れが生じる場合の、対応方法を決める必要がある。



## 【次年度に向けた方策(2)】改善方策

小項目4.0.1	産業研究所長の下、特別プロジェクトと位置づける。
★小項目4.0.2	審議事項をランク分けして、出席審議事項と持ち回り審議事項の原則を決める。
その他	共同研究の成果報告の遅れる者は『産研叢書』でなく、『産研論集』に原稿を掲載する。

## ◎自由記述

## 【点検・評価】&amp;【次年度に向けた方策】

★その他 (自由記述)	研究成果物を定期的に公開することが、研究所としての信頼につながる。次の評価として、研究成果物のクォリティのことがある。学外の客員研究員の分担執筆を増やすことは、学内研究員にも大きな刺激になりうる。
----------------	--

## Ⅲ. 学内第三者評価

<評価推進委員会からの評価> (実務作業は評価専門委員会、評価情報分析室、企画室)

- 全般的に、記述内容がやや具体的な活動内容に偏っています。「組織そのものの適切性」という、やや大きな視点からの検証についても記述してください。
- 設定された目標が適切に実行されていることは評価できますが、単年度で設定されている目標ばかりですので、中期的な目標を設定されることが望まれます。毎年の進捗状況をチェックし、問題点や課題を洗い出し、改善していくことがPDCAの考え方です。

## Ⅳ. 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

★	《小項目ごとの現状説明》4.0.1の追加 産業研究所の理念・目的とするところが学際的（学部・研究科横断の共同研究）であり、実証的（研究対象が経済・産業等の現実的課題）であり、研究と現場の橋渡し役を担うことであるので、それを具体化する狙いにおいて研究組織の目標は適っている。目標は単年度のつもりでないが、状況推移により中間修正（中期的な目標の設定）はありえる。
---	--

## Ⅴ. 本項目の評価指標

<全学的な指標>

--	--

<個別的な指標>

--	--